

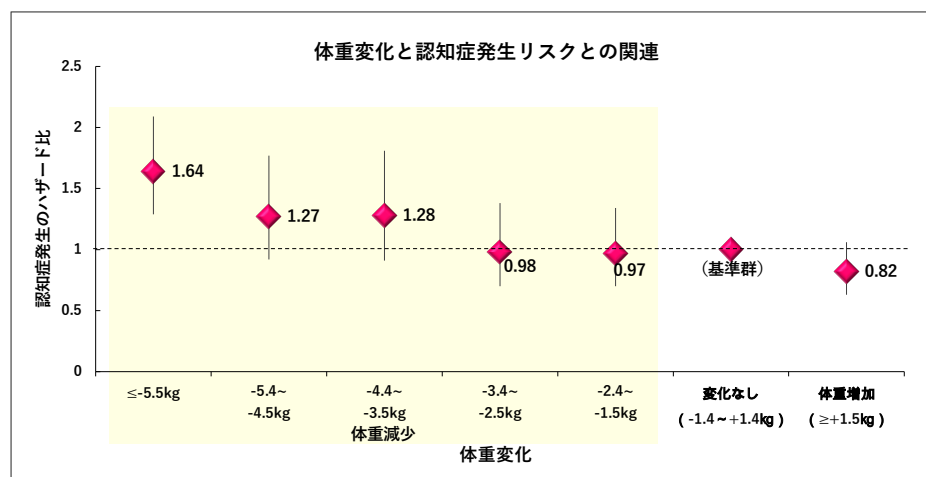
体重の変化と認知症発生リスクとの関連：大崎市民コホート 2006 研究

Association between Long-term Weight Change since Midlife and Risk of Incident Disabling Dementia among Elderly Japanese: the Ohsaki Cohort 2006 Study

2020 年 Journal of Epidemiology 発表

体重が 3.5 kg 以上減少した者で認知症発生リスクが高い

欧米の先行研究では、体重減少は認知症発生リスクの増加と関連することが報告されていますが、欧米人と比べて体重が低い日本人を対象とした研究はありません。本研究は、体重の変化と認知症発生との関連を前向きコホート研究により検証したものです。その結果、体重が 3.5 kg 以上減少した者は認知症発生リスクが高いことが分かりました（図）。



研究データについて

本研究は、2006 年 12 月に実施した「大崎市市民健康調査」のデータと、「大崎国保コホート研究（1994 年に調査実施）」のデータを組み合わせることにより、1994 年から 2006 年までの体重変化量を把握しました。本研究では、2 回の調査に回答した者のうち、介護保険認定情報提供に非同意の者、追跡開始日前に要介護認定を受けた者、追跡開始日前に死亡または転出により異動した者、体重に未回答の者などを除外した 6,672 名を解析対象としました。

体重の変化量について

本研究では、12 年間隔で 2 回の体重情報を用いて、1994 年から 2006 年までの体重変化量を計算しました。解析対象者を 7 群「体重増加（ $\geq +1.5$ kg）、変化なし（ $-1.4 \sim +1.4$ kg）、 $-2.4 \sim -1.5$ kg、 $-3.4 \sim -2.5$ kg、 $-4.4 \sim -3.5$ kg、 $-5.4 \sim -4.5$ kg、 -5.5 kg 以上の体重減少」に分類しました。

他のリスク要因の影響について

本研究は、体重変化と認知症発生リスクの両者に関連する要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、2006 年調査時に回答された性別、年齢、最終学歴、喫煙、歩行時間、心理的苦痛、既往歴（脳卒中、心筋梗塞、高血圧、糖尿病、胃十二指腸疾病、がん）、1994 年の Body Mass Index (BMI)、1994 年から 2006 年までの歩行時間やエネルギー摂取量の変化、新規疾病発生の有無について、多変量解析による調整を行いました。

研究の特徴と限界について

この研究の特徴は、高齢の一般住民を対象とし、長期間にわたって前向きに追跡した大規模コホートデータを用いたものです。ただし、この研究では、①残留交絡または他の交絡因子が結果に影響する可能性がある点、②体重が自己報告であることにより誤分類が生じる可能性がある点などの限界があります。